

日本の詩歌

13

福士幸次郎
千家元麿
百田宗治
佐藤惣之助

中央公論社

目次

山村暮鳥

三人の処女

聖三稜玻璃

風は草木にささやいた

梢の巢にて

黒鳥集・昼の十二時

土の精神・万物節

雲

月夜の牡丹

富士幸次郎

太陽の子

展望

千家元麿

自分は見た

虹

野天の光り・新生の悦び

夜の河・炎天

真夏の星

夏草

207

202

195

187

180

161

120

87

霞

蒼海詩集

遺稿から

百田宗治

最初の一人

一人と全体

ぬかるみの街道

百田宗治詩集

青い翼

風車・静かなる時

282

277

269

260

253

241

231

222

219

何もない庭

偶成詩集

冬花帖

ばいぶの中の家族

蓬 菜

漢口風物誌・山川草木

佐藤惣之助

正義の兜

満月の川

深紅の人

336

326

321

317

314

305

301

293

288

荒野の娘

348

華やかな散歩・季節の馬車

357

琉球諸嶋風物詩集

363

雪に書く・颶風の眼・情艶詩集

367

トランシット

373

西藏美人

382

怒れる神

391

詩人の肖像

伊藤信吉

鑑賞

山室 静

年譜

山村暮鳥

三人の処女

沼

やまのうへにふるきぬまあり、
ぬまはいのれるひとのすがた、
そのみづのしづかなる
そのみづにうつれるそらの
くもは、かなしや、
みづとりのそよふかぜにおどろき、
ほと、しづみぬるみづのそこ、
そらのくもこそゆらめける。
あはれ、いりひのかがやかに

『三人の処女』は、大正二年五月に新声社から自費出版した第一詩集で、島崎藤村が「序」を寄せている。もつとも著者にはこの前に仙台で刊行したパンフレット詩集『La Bonne Chanson』（明治四十三年）があり、その前にも『自然と印象』などにかたりの作を発表している。また『三人の処女』そのものにもすっかり浄書して出版するまでに整理した同題の稿本があり、その『三人の処女』に収められた詩は、刊本には三篇を除き採られていない。これらは暮鳥が多作家で、何物かに駆り立てられるように仕事をし、しかも詩風がぐんぐん変って、昨日の作をすでに古しとして捨て去る傾向を示すものと言える。この傾向は終生を通じてほぼ変らない。

最初期の詩の一つ。

午後のほゝ笑み

みづとりは

かく、うきつしづみつ、

こころのごときぬまなれば

さみしきはなにもにほふなれ。

やまのうへにふるきぬまあり

そのみづのまぼろし、

ただ、ひとつなるみづとり。

途上所見

風は獣けだものの如し、

樹々は

真裸まはだかの女。

黒煙を吐き、まさに運転をはじ

めんとする

埠頭ふ頭の小さな汽船よ。

湖上、

水標はいま客度を示し

風吹かず

波も無し

空に漂ふ旗の白

ああ、洋酒の匂ひ……

(冬の目の重き、重き足音あしおとを聞
いてをる)

待合茶屋の二階の窓より

見よ。――

頸のどの白い、女中、

男もまじる赤き午後の微笑……。

(『自然と印象』から)

当時すでに氏が一つの完成を示
しているのがわかる。その鮮かな
印象派的タッチと、底に流れるや
や頹廢した官能の疼きとで、これ
らの詩は詩壇にかなりの感銘を与

しづかなる日ざしの

つかれか、

夢と落葉^{おちば}。

にんげんなれば

幸無^{さいむ}さを、

われと煩^{わづら}ふ。

三人の処女

指をつたふてび、おろんに流れよる

昼の憂愁、

然^{しか}り、かくて纏^{もち}れる昼の憂愁。

一の処女^{をとめ}をSといひ、

えたものだった。

それにしても『三人の処女』は、全体として混濁した印象をしか与えない。『自然と印象』や『ラ・ボヌ・シャンソン』時代の頹廃味をおびた甘美な官能性を失う一方で——『三人の処女』にはまだそれがある——新しい境地がまだ達されていないからだ。

「沼」は、全体をひらがな書きにした新しい試みのほかに、従来の感覚的なものから一步深く内面に入って、この詩人の心の奥に、つねにあったらしい祈りを眼前の風物の中に託している。すぐれた情調象徴詩としていいだろう。

「途上所見」は、前の詩がゆるやかなテンポとやわらかい言葉で、いわば^{「おどろおどろしい」}颯々^{「ささやかし」}と哀切な思いをただよわせているのに対し、鋭くぶつたぎるような表現で、風物を描く

二の処女をFといひ、

三の処女をYといふ。

然してこれらの散りゆく花が廃園の噴水をめぐり、

うつむき、

匂ひみだれてかがやく。

びおろんの絃よ！

悲しむ如く、泣く如く、

哀訴の、されどこころ好き唄をよろこぶ

銀線よ！

昼の憂愁……

だけでなく、自分自身をもつきはなして断崖している。

この詩人には、ときどきこの種の態度が見られるが、それは何に起因するのか。考えられる一つは、暮鳥が神学校を出た正式の聖職者であって、それと詩作との間にいつも矛盾と緊張を感じさせられていたことだろう。彼にとっては詩的表現がすべてではなく、その背後にあるいは外に、絶対的な生命を求める祈りがあって、詩的表現はしばしばまどろこしいもの、無益なものという嘆きあるいは自嘲があったのではないか。そこで一応官能の世界に溺れこんで、その印象を詩に定着させようとする努力の道程でも、急にそれがわずらわしくなつて、高びしやな、ときには自嘲的表現をとる。その相剋が彼の詩を屈折させもするが、また新しい世界への飛躍をさせることにもなると思われるのだ。

聖三稜玻璃

囁 語

竊盜金魚

強盜喇叭

恐喝胡弓

賭博ねこ

詐欺更紗

瀆職天鵝絨

姦淫林檎

傷害雲雀

殺人ちゆりつぶ

『聖三稜玻璃』は、大正四年に平の人魚詩社から出した第二詩集。

「聖ふりずみ、す」とに与ふ」なる室生犀星の「序」がついている。日

本近代詩史の上で突然変異とも見られたほどに斬新な、のちのいわゆる未来派立休派ふうな詞藻を盛つけた詩集で、造本も思いきった豪華な総皮装で世人を驚かした。

「この廃顔せる世界に於いて唯一

新鮮なる生命イルミネエシヨンの宝石よりも美しき第一詩集をお頒ちする」(広告文)と号したのは誇張でなかったが、そこには人おどかしの奇をねらった点もなかったとは言えないだろう。日夏耿之介は『明治大正詩史』で「官能の交感の新味をねらって、しかも本然性に欠けて、凡俗の好奇心を挑発するにすぎず」と評している。たしかに本然性には多少欠けるところがあり、作者自身もまもなくこの詩風を捨ててしまう。しかし、

墮胎陰影^{たたいいんえい}

騷擾ゆき^{さうぜう}

放火まるめる

誘拐^{いうかい}かすてえら。

だんす

あらし

あらし

しだれやなぎに光あれ

あかんぼの

へその芽

水銀^{ヒスチ}敬私^{ソア}的利亜

はるきたり

あしうらぞ

それがただ人の好奇心を挑発することをねらっただけの珍奇な詩風とするのは当らない。その背後にはやはり至純痛切な生命を求める祈りがあって、その晦澁^{かいせき}斬新な意匠^{いしょう}の裂目^{ひびき}からふき出している。

ちなみに、この突然変異とも見える大胆な詩風も北原白秋の『白金之独楽』から大きな影響を受けていることが、和田義昭の研究『山村暮鳥研究』で実証された。暮鳥はこのころ白秋門の犀星・朝太郎と結んで人魚詩社を作り、詩誌『卓上噴水』を出している。白秋の影響は十分に考えられるのだ。白秋の『掌』を。

光リカガヤク掌ニ／金ノ仏ゾオ
ハスナレ。

光リカガヤク掌ニ／ハツト思ヘ
バ仏ナシ。

光リカガヤク掌ヲ／ウチカヘシ
テゾ日モスガラ。